様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７３０６３０

研究課題名（和文）西田哲学の比較人間形成論的研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of NISHIDA Philosophy from the Viewpoint of Human Formation

研究代表者
櫻井　歓（SAKURAI, Kan）

日本大学・芸術学部・准教授

研究者番号：６０４０９０００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、これまで多様な学問分野から参照されてきた西田幾多郎のテクストを、教育学の分野から人間形成論として読解することを試みた。その研究成果は三つに分節化できる。１．木村敏（精神医学）における西田哲学の受容に着目し、教育学的「自立／自律」概念を再検討した。２．ドナルド・ショーンの専門家論を媒介として、西田の「行為的直観」概念とマイケル・ポランニーの「暗黙知」概念との共通性を指摘し、教師の実践知への西田哲学からのアプローチを試みた。３．西田の遺墨のうち松本厚（ギリシア哲学）に贈与されたと推定される作品一点の由来を探究し、西田による書の制作と贈与の意義について人間形成論的観点から考察した。

研究成果の概要（英文）：The text of NISHIDA Kitaro, a modern Japanese philosopher, has been referred to from various fields. In this study, as a study of science of education, I aimed to read his text as a theory of human formation. The results of research are as follows. (1) We can rethink the concept of "independence / autonomy" in education by referring the reception of Nishida philosophy by KIMURA Bin (psychiatry). (2) Referring the theory on professionals by Donald A. Schon, we can point out a commonality between "acting intuition"(Nishida) and "tacit knowing"(Michael Polanyi), and can approach the practical wisdom of teachers from Nishida philosophy. (3) Investigating a piece of Nishida's calligraphy presented to MATSUMOTO Atsushi (Greek philosophy), we can find the significance of writing and presenting calligraphy by Nishida.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：西田幾多郎　人間形成論　木村敏　行為的直観　暗黙知　マイケル・ポランニー　ドナルド・ショーン　松本厚

１．研究開始当初の背景

(1) 近代日本の哲学者・西田幾多郎（1870-1945）の思想は、従来、哲学分野はもとより、仏教学の鈴木大拙、キリスト教神学の滝沢克己、生物学の今西錦司、精神医学の木村敏など学問諸領域の研究者に影響を与え、各分野において応用的・発展的な解釈がなされてきた。教育学においても、彼の門下生にあたる木村素衛や下程勇吉らが教育学分野で活躍したことに見る通り、その影響は見落とすことができない。また近年では、科学哲学、認知科学、美学・芸術論、看護学などの諸分野との関連でも西田の思想が参照されている。西田のテクストに関しては、これまで学問諸領域から多様な思想的コンテクストが設定され、いわばそこには種々のコンテクストの織り成す学際的な場が形成されていると言える。また国際的にも、欧米諸国や東アジアにおいて西田哲学あるいは京都学派の哲学への注目がなされてきた。

　また、西田の思想に幅広い関心が寄せられるなか、岩波書店より新版『西田幾多郎全集』（2002-09 年）の編集・刊行が進められ、2009 年には全 24 巻が完結したところであった。

(2) 西田に関しては、すでに哲学的研究・思想史的研究・伝記的研究など多様なアプローチにより多数の先行研究が発表されてきたが、教育学分野では西田を対象とした本格的研究は必ずしも進んでいるとは言えない。こうしたなか、教育学の基礎研究として、西田のテクストを人間の発達や変容を説明する人間形成論として読解し、教育学の分野から新たなコンテクストを設定しようとする試みとして、本研究を構想するに至った。

(3) 研究開始当初、すでに筆者は、「西田幾多郎の人間形成論――近代日本哲学にみる個の形成の論理」をテーマに掲げ研究を進めていたが、先行研究を検討する過程で特に示唆的であったのは、新田義弘および中村雄二郎によるそれぞれ次のような指摘であった。

　新田義弘は、西田の哲学的思惟の方法に着目して、「非対象性という意味での深層次元の働きを表現する可能性が西田の方法のなかに潜んでいる」とみて、「西田の思惟が対象性の領域と非対象性の次元とをつなぐ方法的通路を開きつつあった」と述べている（『現代の問いとしての西田哲学』岩波書店、1998 年、32 頁）。近年の人間形成論の動向としても、従来の「発達」概念が相対化され、教育人間学の領域から、「溶解体験」（矢野智司）や「無分節」（西平直）への着目など非対象性の次元を視野に収めた研究が志向されつつあるなかで、西田の思想は、対象性の領域に還元されえない深層次元を射程に収めた人間形成論の探究に寄与するものとして期待される。

　一方、中村雄二郎は、「深層の知と制度論的思考」を人間の知における垂直軸の活動と水平軸の活動とみて両者の緊張関係と相補性を指摘するとともに、西田における制度論的思考の脆弱性を指摘している（『西田幾多郎Ⅱ』岩波書店、2001 年、240-244, 290 頁）。

(4) 研究開始当初までに、筆者は、「深層の知と制度論的思考」として中村の捉えた問題を人間形成論の領域で受けとめつつ、西田の人格論・他者論・芸術論・「個の自由」といったテーマでテクスト読解を中心とする研究発表を行ってきた。だが、土居健郎『「甘え」の構造』（1971）を再読する機会を持つに及び、精神分析や比較文化論、そして西田を含む日本思想などが「甘え」のテーマのもとに縦横無尽に援用される手法に刺激を受けることとなった。そして、人間形成論としての西田研究を、西田哲学の独特な用語法の内に閉ざすことなく、より開かれた形で構成するためにも、人間諸科学の成果を視野に収めた比較思想的な観点が重要であることに思い至った。このことが、本研究課題「西田哲学の比較人間形成論的研究」を設定する契機となった。

２．研究の目的

(1) 先述のように、西田の思想は、これまで学問諸領域から多様なコンテクストのもとに参照されてきた。教育学の基礎研究としての本研究は、西田のテクストを人間の発達や変容を説明する人間形成論として読解し、教育学の分野から新たなコンテクストを設定しようとする試みである。テクストの読解に際しては、精神医学、認知科学、宗教研究などの人間諸科学との間での比較思想的な検討を重視し、「比較人間形成論」というべきコンテクストにおいて解釈することを目指す。これにより、人間形成の論理が、西田哲学の独特な用語法に閉ざされることなく、現代の人間諸科学の用語法にいわば翻訳可能な形で開かれることが期待される。

(2) 本研究は、教育学分野からの初の本格的な西田幾多郎研究となる可能性をもつものであり、本研究により西田のテクストが新たに人間形成論的コンテクストのもとに捉え直されることとなる。

　研究を円滑に進める基礎として、『西田幾多郎全集』の電子データ化、諸領域の文献の収集・検討、および国内・海外での資料調査を有機的に結合し、そのうえで西田のテクストを精神医学、認知科学、宗教研究などの人間諸科学との比較という観点から、いわば比較人間形成論として読解していこうとする点に、本研究の独創性がある。

　本研究の持ちうる波及効果として、例えば次のような人間形成に関わる諸事象が西田哲学と人間諸科学とを架橋する形で説明可能となるのではないかと予想される。(a)乳幼児期の対他関係を通じての自己形成、(b)スポーツ・芸術などの経験を通じての自己形成、

(c)教師の実践知・臨床知としての「教育的タクト」（J.F.ヘルバルト）や「暗黙知」（M.ポランニー）、「反省的実践」（D.ショーン）など。こうしたことが教育学研究としての西田研究の持ちうる積極的意義であり、本研究もその一端を担うはずである。

３．研究の方法

(1) 本研究の方法論的立場は、現代の人間諸科学の成果を見据えた比較思想研究の方法を介して西田のテクストの読解を深化させ、人間形成の論理の解読を目指すところにある。比較思想研究の対象としては、精神医学、認知科学、宗教研究などを視野に入れる。こうした方法論に立つテクスト読解を円滑に進めるために、(a)新版『西田幾多郎全集』の電子データ化、(b)諸領域の文献の収集・検討、(c)国内・海外での資料調査を三つの基礎的作業として有機的に結合して、研究を効果的に進めていく。

(2) 西田研究における比較思想的な方法の重要性は、すでにいくつかの先行研究により示唆されている。例えば坂部恵は、西田の他者論を、ラカンの鏡像段階説や、メラニー・クラインに典型をみる鏡像段階以前の母子関係の研究にも通じるものとみている（「西田哲学と他者の問題――「私と汝」をめぐって」、上田閑照編『西田哲学 没後五十年記念論文集』創文社、1994 年 所収）。また近年の研究としては、西田の「行為的直観」を認知科学における「状況的行為」（situated action）と解釈して、両者に主知主義を超えようとするスタンスの共通性をみる研究（張政遠「状況的行為としての行為的直観――主知主義の立場を超えて」、『西田哲学会年報』第 4 号、2007 年 所収）などが発表されている。

これらの研究は、西田哲学と人間諸科学とを架橋するうえで、教育学分野からの西田研究としてさらに発展させられるべき論点を示している。

(3) 上述のような比較思想的方法を介してのテクスト読解を円滑に進めるための基礎的作業として、新版『西田幾多郎全集』の電子データ化を行う。これにより、テクスト検索の利便性を高めることができるものと期待される（ただし、電子データの利用は研究者本人に限定するものとする）。併せて、国内・海外での西田研究の動向や関連諸領域の研究成果（思想的コンテクスト）、なお未解明な部分の残る西田の同時代的状況（歴史的コンテクスト）に関しては、諸領域にわたる文献の収集・検討のほか国内・海外での資料調査を行い、これらを基礎として研究をより重層的に構成することが期待される。

４．研究成果

(1) 本研究の成果は大きく三つに分節化することができる。それぞれの概要を各論的に示せば以下のようになる。

(2) 第一に、「臨床哲学」を掲げる精神医学者・木村敏（1931- ）における西田哲学の受容に着目しながら両者を人間形成論として読解し、教育学的「自立／自律」概念の再検討を行った。これは、教育思想史学会第 21 回大会（2011 年 9 月）でのコロキウム企画「教育学的「自律」概念の再検討」（企画：関根宏朗）として発表された共同研究の一環として筆者が担当した研究内容である。

「「おのずから」より「みずから」へ――木村敏と西田幾多郎を介しての「自立／自律」概念の再検討――」と題する本研究では、教育の目的とされる個人の「自立」あるいは「自律」という概念を、古来の日本語の「おのずから」と「みずから」という概念対を比較対象として捉え直すことを試みた。木村の自己論は、自然（おのずから）と自己（みずから）を等根源的なものと捉える点に特徴があり、そこでは「自立／自律」の課題は「おのずから」としての自然に対して「みずから」の力で「自分」となることとして語られる。本研究では、木村の自己論とそれに多大な影響を与えている西田哲学に依拠しながら、しばしば対立的に捉えられてきた「依存／他律」と「自立／自律」とは相互に浸透し合う関係があり、単純な二項対立図式では捉えられないことを明らかにした。すなわち、①「依存／他律」のなかに「自立／自律」を見ること〈やがて「みずから」となりゆく「おのずから」〉と、 ②「自立／自律」のなかに「依存／他律」を見ること〈「おのずから」に合一しようとする「みずから」〉、という理念型として示すことができるような、「自立／自律」をめぐる二つのパラドクスを指摘した。本研究は、これまで別々に論じられてきた「自立／自律」概念（西洋的概念）と、「おのずから」と「みずから」という概念対（日本的概念）とを架橋して統一的に論じたところに、その意義・重要性を持つものと考えられる。（次項「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕の①、〔学会発表〕の③に対応。）

(3) 第二に、ドナルド・ショーン（Donald A. Schön, 1930- ）の専門家論を媒介として、西田の「行為的直観」概念とマイケル・ポランニー（Michael Polanyi, 1891-1976）の「暗黙知」概念との共通性を指摘し、教職の専門性を構成する教師の実践知への西田哲学からのアプローチを試みた。

「行為的直観と暗黙知――教職の専門性への西田哲学的アプローチ――」との題目により日本教育学会第 71 回大会（2012 年 8 月）にて発表を行った本研究では、西田の後期思想で知識論の中心概念となった「行為的直観」と、「反省的実践家」論により著名なドナルド・ショーンが「行為の中の知（knowing-in-action）」を論じるなかで参照

しているマイケル・ポランニーの「暗黙知（tacit knowing, tacit knowledge)」の概念との共通性に着目することにより、西田哲学と教職専門性論とを架橋することが可能であることを論じた。抽象度の高い西田の概念が、教職の専門性という教育学のアクチュアルなテーマと結びつく可能性を示したところに、本研究の意義と重要性が存するものと考えている。（次項「５．主な発表論文等」の〔学会発表〕の②に対応。）

⑷ 第三に、西田の遺墨のうち松本厚（1904-96、ギリシア哲学）に贈与されたと推定される作品一点の由来を探究し、西田による書（墨蹟）の制作と贈与の意義について人間形成論的観点から考察を行った。西田はその生涯に多数の書を遺しているが、由来が未詳である西田の墨蹟一点を筆者が入手する機会を得たため、当該作品の由来を探究することにより、未解明な部分の残る西田の同時代的状況（歴史的コンテクスト）にアプローチする一つの試みとした。

「西田幾多郎による書の制作と贈与――松本厚への贈与作品の検討を中心に――」と題して北陸宗教文化学会第 20 回学術大会（2013 年 10 月）にて発表した本研究では、『西田幾多郎遺墨集』（1977）の収録作品と同内容であり、かつ同書の編集過程では未発見であったとみられる作品一点の由来を報告するとともに、西田による書の制作と贈与の意義について考察した。当該作品にしたためられた言葉は「黙々與天語 黙々與天行」（黙々として天と語り 黙々として天と行く）というものであり、西谷啓治（1900-1990）や唐木順三（1904-1980）も晩年の西田から同じ言葉を贈られていることが知られている。当該作品は、そうした墨蹟の一点として晩年の西田から松本厚に贈与されたと推定されるものである。西田の書については、これまで墨蹟そのものに焦点を当てた紹介や解説がなされてきたが、本研究では、西田による書の制作と贈与という行為を、同僚や後進など受贈者との関係のうちにある行為として捉え、こうした観点から墨蹟＝作品を捉え直すことを試みた。当該作品については、後進に贈られたメッセージとして、西田自身の生き方や心境を示して後進を激励する意義を持つものであったとする人間形成論的観点からの考察を行った。なお、本研究は東京都および石川県での資料調査を経て発表に至ったものである。（次項「５．主な発表論文等」の〔学会発表〕の①に対応。）

⑸ 以上⑵～⑷の各項に挙げた研究成果は、それぞれ西田のテクストを読み解く教育学分野からのコンテクスト設定の試みである。しかし、これらはいずれも、その端緒を示すものに過ぎず、未だ十分に議論を展開するには至っていないと自己評価せざるを得ない。上記⑵～⑷に示した各個別研究の相互関係についても、それらを有機的に関連づける大きなコンテクストを設定できたとは言い難い。今後、より多くの教育学分野のテクストを踏まえて西田のテクスト読解のコンテクストをより堅固で豊かなものとしていくことが課題となると考えている。

⑹ なお、本研究の一環として、2012 年 2 月にアメリカ合衆国において、西田哲学研究に関する文献資料の調査、ならびに当該分野に関する在米日本人研究者へのインタヴュー調査を行った。コロンビア大学（ニューヨーク）の東アジア図書館にて西田関係の資料の調査を行い、豊富な日本語文献と英語文献の所蔵を確認したほか、西ワシントン大学（ワシントン州ベリンハム）の図書館においても同様の調査を行うとともに、同大学の遊佐道子教授に面会して米国での西田哲学研究の状況等に関するインタヴュー調査を行った。海外での資料調査・研究状況調査は、西田のテクストの外国語訳やその読解の観点を探る等、テクストを読解する際の国際的なコンテクストを豊かにするうえで重要であり、今後こうした海外調査も反映させながら研究を発展させていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 関根　宏朗、尾崎　博美、小山　裕樹、<u>櫻井　歓</u>、宮寺　晃夫、下司　晶、「教育学的「自律」概念の再検討」、『近代教育フォーラム』（教育思想史学会紀要）、査読無、第 21 号、2012 年、209-221 頁

〔学会発表〕（計３件）

① <u>櫻井　歓</u>、「西田幾多郎による書の制作と贈与――松本厚への贈与作品の検討を中心に――」、北陸宗教文化学会 第 20 回学術大会、2013 年 10 月 19 日、 金沢大学サテライトプラザ

② <u>櫻井　歓</u>、「行為的直観と暗黙知――教職の専門性への西田哲学的アプローチ――」、日本教育学会 第 71 回大会、2012 年 8 月 25 日、名古屋大学

③ <u>櫻井　歓</u>、「「おのずから」より「みずから」へ――木村敏と西田幾多郎を介しての「自立／自律」概念の再検討――」、教育思想史学会 第 21 回大会、2011 年 9 月 19 日、日本大学文理学部

６．研究組織

⑴ 研究代表者

櫻井　歓（SAKURAI, Kan）
日本大学・芸術学部・准教授
研究者番号：６０４０９０００

以上